

彼岸花

「ねえ、これ、何ていう花。」

ぼくは、墓参りの途中で、赤く燃えるような色をしたたくさんの花を見つけ、父に聞いた。

「それは『曼珠沙華』まんじゆしやげという名前の花だそうだけれど、呉の辺りでは、毎年、秋の彼岸のころに咲くので、『彼岸花』と呼ばれることが多いね。」

「彼岸って。」

「彼岸というのは、仏教では、春と秋に先祖を供養する日で、春分の日とか秋分の日とも呼ばれているね。」

「へえ、だから墓参りをするのか。」

「毎年、そのころに見てごらん。必ず咲いているよ。」

「必ず。」

「咲いている期間は短いけど、昔から彼岸には真っ赤な花を咲かせているね。」

「ふうん：。」

ぼくは、

（本当かな。）

と思いながら、父の話聞いた。

それから何日かたって彼岸花が咲いていた場所に行くと、もう花はかかっていた。そして、小さな葉が出ていた。葉は、それからどんどんふえ、冬の寒い時期にはおおいしげっていた。

（花が咲いたあとになって、葉がしげってくるのか：。）

でも、あたたかくなると、その葉もだんだん黄色くなり、夏が近づくにつれ、とうとうかかってしまった。それに、今年は空梅雨で、テレビのニュースでも、断水になっている地域があるというし、農家は大変な被害を受けている様子だ。

（父さんは、彼岸のころには必ず咲くと言っていたけれど、本当に大丈夫かな。）

ぼくは、かかってしまった葉のあとを見ながら、少し期待がはずれた



ような気がした。

夏が過ぎ、今年も彼岸が近づいてきた。彼岸花が咲いていた場所を見ても、あいかわらず何もない。

（やっぱりかかれてしまったんだ。今年は、雨も降らなかったし、彼岸に花が咲かない年もあるんだ。）

それから数日後、彼岸まであと五日という日のことだ。

「あつ、くきが出ている。」

つぼみをつけた小さなくきが土の中から顔を出している。くきは、ぐんぐん伸びていった。つぼみもすぐに赤くそまり、彼岸の二日前には花が開き始めた。そして、彼岸になると、きつちりと満開の花を咲かせた。まるで、彼岸を待っていたかのような成長の仕方だ。

（やっぱり彼岸花は、彼岸に咲くんだな。どんな気候のときも、昔からずっとこうして花を咲かせてきたんだろうな。）

ぼくは、自然の不思議さにつくづく感心した。

それから数年。彼岸花は、冷夏の年も、台風の多い年も、あいかわらず彼岸のころ、同じ場所に花を咲かせている。年々、花もふえていつているようだ。満開のころには、赤いじゅうたんをしきつめたように、思わず見とれてしまう。

しかし、その場所に、今年、道路がつくられ始めた。

「便利になるな。」

「これからは、年寄りでも楽に墓参りができそうだ。」

道路がつけば、これからは墓参りも車で行けるし、買い物に行くのにも便利になるだろう。でも、ぼくは墓参りをする人たちの喜んでいる会話を聞きながら、何だかさみしい気がしている。

